

浅香幸雄先生と歴史地理学会

山 村 順 次



浅香幸雄先生
(真貝 宏会員提供)

浅香幸雄先生は歴史地理学会の初代会長であり、1966(昭和41)年に就任されて以後8年間の長きにわたって、その責務を果たされました。初代会長ですが、実はすでに歴史地理学会の母体である日本歴史地理学研究会が、菊地利夫先生の提唱のもとに8年前の1958(昭和33)年に発足し、菊地先生が会務全般の責任者として常任委員長(1962年からは浅香先生が常任委員長)を務められてきた経緯がありました。この研究会が東京および近郊在住の研究者を中心として設立されましたので、事務局は立教大学の中田榮一先生のご尽力で文学部地理学研究室におかれ、以後中田先生をはじめ多くの常任委員の献身的な運営のもとに、研究会は軌道に乗ることになりました。

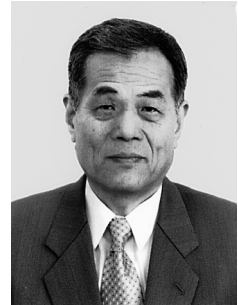
浅香先生と菊地先生は、東京教育大学(現筑波大学)の前身である東京文科大学の同窓生であり、ともに内田寛一先生を指導教官として研究を進めてこられた歴史地理学者です。新生の歴史地理学会が発足するに当たり、日本歴史地理学研究会発足時に顧問として、さらに歴史地理学会へと発展したときには名誉会員として指導にあられた内田先生について、浅香先生はその教えを次のように記しています¹⁾。すなわち、明治中期の歴史地理学は、吉田東伍・喜田貞吉先生など歴史学者による「歴史の地理的解釈」でしたが、内田先生は大正末に「現在を知るための歴史地理学」を主張され、さらに「将来の開発に

対してサジェスションを得よう」と提言をされたことを高く評価されています。また、温顔のなかにも厳格な指導姿勢で学生に対応し、主に近世地方文書の厳密な資料吟味を駆使して実証的に論証する研究態度を指導されたことを、紙碑の中で回想されました。

こうした研究態度は、まさに浅香先生にそのまま受け継がれており、先生が日本観光協会専門員として全国各地の観光診断に従事された際にも、個性的な歴史的事象を観光資源として観光地域振興に活かす教養観光を、いち早く提唱されたことに相通じるところがあります。浅香先生は会長就任の「あいさつ」の中でも、学会の将来展望について、若い研究者の会員増強とともに、歴史地理学は地域についての総合的理解を得る学問であり、地域開発など応用面での学会の貢献を強く訴えました²⁾。

浅香先生は1960年～1988年の間、日本歴史地理学研究会や歴史地理学会での例会で8回の研究発表を行い、歴史地理学紀要にも3編の論文をまとめられています。近世期の街道や宿場を中心に、宗教集落などの克明な事例研究を重ねられており、先生のご指導を賜ったものとして、ご高齢にもかかわらず絶えず前向きに研究に取り組み、発表されてきた姿勢に接することが出来ました。

浅香先生の出身地である高岡に近い砺波市文化会館を会場とした1984(昭和59)年4月



著者 山村順次会員
(著者提供)

の第27回歴史地理学会大会は、先生が設立に関わった砺波散村地域研究所と富山地学会との共催で盛大に行われました。その時の巡検記録によれば、「砺波平野と五箇山の交流およびその歴史的景観」のテーマに集った参加者約100名は大型バス2台に分乗して、浅香先生をはじめ地元研究者など9名の案内者のもとに実施されたとあります³⁾。この大会に先立つ1973(昭和48)年8月には、学会の夏季臨時大会が富山大学で開催され、会員をはじめ地元の研究者を含めて約200名もの方々が参集しましたが、富山県や県の経済同友会・商工会議所、そして関係市町村の多大の援助があったといい⁴⁾、これにも浅香先生の蔭ながらのご配慮が大きかったものと推察されます。

浅香先生と歴史地理学会といえば、先生が畠山文化財団からの助成金確保に多大のご尽力をされたことを、学会員一同忘れることは出来ません。日本歴史地理学研究会が創設された当時は、年会費200円、会員数約150名ほどであり、年間予算は3万円ほどに過ぎず、紀要第1号の印刷代が発行1年後でも払えなかったようです⁵⁾。研究会の設立に関わり、財政の困窮事情を十二分に分かっていた浅香先生は、歴史地理学会会長に就任した際に、畠山文化財団が学会に研究費を助成していることを知り、その折衝にあたられました。菊地先生が「浅香会長は畠山財



畠山文化財団のある畠山記念館正門



浅香幸雄先生-1948年-
(横山昭市会員提供)

団から研究助成金を2年おきにとりつけたことは、まさに干天に慈雨であった。」と記すほどでした⁶⁾。

畠山文化財団は、(株)荏原製作所創立者の畠山一清氏が科学技術の研究奨励と教育・学術の向上発展に資するために、私財

を投じて1960(昭和35)年4月に設立したものです。助成対象は理科系の学問奨励が主体であると思われ、浅香先生がいかなる経緯でこの財団から研究助成金を確保したのかは不明です。しかし、畠山一清氏が石川県七尾市出身であることから、富山県の政財界と太いパイプがある浅香先生が、その交渉に大きな役割を果たされたのではないのでしょうか。

筑波大学の小口千明氏の調査によりますと⁷⁾、現在学会事務局で保管されている会計帳簿では、1980(昭和55)年から今日まで、四半世紀にわたって毎年20万円の助成金を受けてきたことが明らかにされました(但し、1982・1983年は資料なし)。また、1966(昭和41)年刊行の歴史地理学紀要第8号の浅香先生の序文の中に、同年初夏に畠山文化財団からの助成金交付を受けたことへの謝辞が述べられています。浅香先生が歴史地理学会会長に就任されたときから、当初は2年ごとに助成金を受けることになり、1973(昭和48)年以後は紀要の序文における畠山文化財団への謝辞が、一部を除いて継続されていますので、毎年助成を受けることになったのです。ここに、畠山文化財団には40年近くも前から歴史地理学会を支えていただいているのです。山崎謹哉先生によると、田村正夫先生と一緒に白金台の財団へ助成交付の申請に伺ったことがあるとの話であり、筆者もまたそのような記憶があります。

このように、浅香幸雄先生は歴史地理学の
学問研究や学会運営のみならず、畠山文化財
団からの助成金交付にいたるまで、歴史地理
学の発展のために全身全霊を投じられたので
あり、会員数が600名を超え、かつ若い世代
の研究者が多数活躍されている現在の礎を築
いていただいたことに対し、先生の御霊に心
からの感謝を申しあげる次第です。

(城西国際大学)

〔注〕

- 1) 浅香幸雄 (1969)：現代日本歴史地理学の開
拓者 内田寛一先生。会員通信, 第51号,
6～8頁。
- 2) 浅香幸雄 (1966)：あいさつ。会員通信, 第
34号, 1頁。
- 3) 原田ひとみ (1984)：大会巡検報告。歴史地
理学, 第125号, 51～53頁。
- 4) 浅香幸雄 (1975)：印象深い思出と解決した
い課題。歴史地理学会会報 (創刊100号記念
特集号), 第100号, 3～6頁。
- 5) 前掲4)
- 6) 菊地利夫 (1975)：歴史地理学会会報100号
を記念して。歴史地理学会会報 (創刊100号
記念特集号), 第100号, 14～19頁。
- 7) 小口千明氏には、畠山文化財団の助成金交
付の調査について、ご尽力をいただいた。